



井上 彰

東日本大震災の津波被害によって、福島第一原発はいまなお深刻な状態にある。とくに原子炉と使用済み核燃料プールの冷却は、これ以上の放射性物質の拡散を防ぐためには欠かせない作業である。その作業に、東京電力や関連・協力会社の社員、そして消防隊員や警視庁の機動隊員、自衛隊員が決死の覚悟であたっている(た)ことは周知の通りである。

多くの国民やマスコミは、そのことに対する賛辞を惜しまない。とくに、連続放水作業にあたった東京消防庁の派遣隊の隊長の涙に、心打たれた人も多かったのではないか。「今回の震災は天罰だ」と言い放った人物

文化

までもが、その活躍には感涙にむせぶほどであった。

しかし、冷却作業に懸命に取り組む彼らを英雄視する一方で、彼らが遂行したこと、あるいは現在行っていることについて、正義の観点から語られることはほとんどない。正直、あのサンデル・ブームは一体何だったのかと思う。

決死の作業は正当か

原発事故の判断に政治哲学を

たのかと思う。

何より疑問なのは、東京電力および関連・協力会社の社員、消防隊員や自衛隊員らに命がけの作業に従事してもらうことへの慎重論が一切出てこないことである。政府が被ばく限度値を100ミリシーベルトから250ミリシーベルトに上げ、消防隊員らに決死の覚

悟を迫ったことは記憶に新しい。この政府のやみくもな方針に対する批判は、(当事者サイドの一部を除けば)ほとんど見受けられない。

派遣された機動隊員にとっても消防隊員にとっても、さらには自衛隊員にとっても、原子炉の冷却作業は普段の訓練や経験

幸福をうたう功利主義の、きわめて素朴な原理にのっとっているように思われる。しかし多くの者の幸せのために少数の犠牲を厭わないこの原理を、われわれは果たして躊躇なく是認するのだろうか。

東京電力の社員や関連・協力会社の社員についてはどうだろう

したさまざまな属性を一顧だにせず、「東京電力との密接な関わり」という属性だけで熾烈極まる作業にあたる責任を当然視するのは、あまりにも暴力的である。

もし、冷却作業に従事する者をひたすら賛美するだけで、政府が規則を変えてまで彼らに当の作業を課す正当性に思いをめぐらさないのであれば、われわれは思考停止に陥っていると言わざるを得ない。

が生かせるかどうかもわからない、まさに想定外の任務だろう。専門家が恥ずかし気もなく「想定外」と公言する事態に対し、想定外の任務を果たすように求めることを道徳的に正当化するものとは一体何か。よくいわれる「国民の生命を守るために」という理由は、最大多数の最大

う。彼らは直接の当事者であることから、冷却作業に従事する責任がある——このような意見もちらほら耳にする。しかし、彼らは東京電力や関連・協力会社の社員である以前に、われわれと変わらぬ一般市民である。彼らにもわれわれと同様、家族もいれば交友関係もある。そう

(いのうえ・あきら)『群馬大講師、政治哲学』